日本社会心理学会会報 192 号

発行　日本社会心理学会　http://www.socialpsychology.jp/
編集・制作　池田謙一
113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1　東京大学大学院人文社会系研究科 池田研究室

2011 年 12 月 2 日

日本社会心理学会大会第 52 回大会終わる

2011 年度学会大会は 9 月 18 日（日）と 19 日（月・祝日）の 2 日間、名古屋大学で開催されました。東日本大震災の衝撃と痛みとを乗り越え、先に進む意欲をかき立てられた大会でした。吉田準備委員長、北折・原田事務局幹事はじめスタッフのみなさん、厚く感謝申し上げます。

若手会員の印象記、実施概要報告をご覧ください。

● 今号の主な内容

【1 面】第 52 回日本社会心理学会大会 印象記・実施概要
【3 面】2011 年度日本社会心理学会賞―第 13 回選考結果および各賞受賞者の声
【5 面】 2011 年度国際学会シンポジウム企画の補助対象者および大学院生海外学会発表支援対象者
【6 面】訃報　田中國夫名誉会員
【6 面】東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか
【7 面】若手会員、声をあげる　森本裕子、及川昌典、瀧澤純・澤海崇文
【10 面】社会心理学を支えていただいている方々：その２
【11 面】『社会心理学会研究』掲載予定論文、会員異動

印象記 1

清水裕士

日本社会心理学会第 52 回大会が、名古屋大学にて 9 月 18 日と 19 日に 2 日間にわたって開催された。今年は日本心理学会が日本大学で行われていたこともあり、私は 18 日の朝に東京を出発し、大会開始ギリギリに名古屋に到着することになった。しかし、大学の真下に地下鉄が走っていることもあり、非常にスムーズに大学まで到着できた。母校である大阪大学の交通の不便さを思うと感激ものである。

今年から大会発表論文がこれまでの 2 ページから 1 ページに変更された。投稿当時は「1 ページでまとめられるか！」と憤っていたものの、実際に大会発表論文集を持ち歩く当日になってみると「これはこれでいいものだ」と思ってしまった。しかも、今回の論文集の表紙は名古屋大学のキャンパスマップになっており、会場を探検するのにページを開かなくてもいいというすばらしい出来栄えだったので、これまた感激ものである。大会が始まってもないのに感激しっぱなしであった。

会場をいろいろ歩き回って、場所の使い方がとても考えられているなと感じた。ポスター会場はかなり大きめのスペースを使っており、とても議論しやすい環境が提供されていたし、休憩所も受け付けの近くに設けられていて、人との待ち合わせに使いやすかった。私は口頭発表会場をいろいろハシゴする方なのだが、口頭発表会場がすべて 1 階の教室にあてられていたのもよかった。こういった工夫は今後にも引き継がれてほしい点だなと思ったのを覚えている。

さて、お昼になって総会の天むす弁当をおいしく頂いた後、大会準備委員会企画シンポジウムに参加した。そのタイトルも、「社会心理学における社会とは何か」という大きなテーマを掲げたもので、とても楽しみであった。余談だが、このシンポジウム中に急にトイレに行きたくなってしまった。しかも何を間違えたのか Twitter に「シンポジウム中だがトイレに行きたいなう」などとつぶやいてしまったため、広報の三浦先生に「清水はシンポジウムに参加していた」と認識され、今ここで大会印象記を書いているのである。

最初の話題提供者は唐沢穣先生だった。これまで個人の認知プロセスだと考えられていた態度変容やステレオタイプについての記憶などが、実は他者に伝達することによって助長されたり媒介されたりしているという研究が紹介された。次の話題提供者は五十嵐祐先生で、社会ネットワーク分析を用いた友人関係ネットワークと集団同一視についての研究が紹介された。興味深かったのは、外集団メンバーと接触が少ない人は、同様に外集団メンバーと接触が少ない人を選択するという結果であった。つまり、集団の境界がよりはっきりする集団とそうでない集団に分化するということである。三人目の指定討論者である浦光博先生の発表では、「社会とは、rVLPFC（排斥の痛みを和らげる脳部位）である」、インパクトあるメッセージが述べられ、排斥による痛みを抑制する機能は、社会的経済地位が高い場合に強くなるという研究結果が紹介された。最後の大坊先生の指定討論では、社会心理学は社会を考えながら、常に人を考えてきた、という点を強調されていた。そして、その人を見るときにどのような見方（あるいは価値）が求められるのかという大きなテーマについても触れられていた。

このように先生方の最新の研究知見やメッセージに触れながら（便意にもちょっと耐えながら）、社会心理学が考える社会ってなんだろうといろいろと考えさせられ、非常に刺激的なシンポジウムであった。そのときには自分なりの答えはでなかったのだが、社会心理学者は社会そのものというより、社会の内と外の境界（ステレオタイプやネットワークの境界、排斥）を人が認識したり、強調したりするダイナミクスにつ

いて研究してきたのかもしれないなぁと今になって考えたりもした。

学会初日を締めくくる懇親会では、多くの人と議論させていただいた。今年は発表が初日だったこともあり、発表の内容についていろいろ意見がもらえたのはありがたかった。そのおかげでひつまぶしが食べられなかったのは今でも心残りではある。

翌日は、早稲田大学の尾関さんと私が企画したマルチレベル分析についてのワークショップを行った。朝一番のセッションにもかかわらず多くの人に参加いただけたので、企画者としては一安心であった。なお、この WS 資料は清水のブログ（http://bit.ly/simizu706）からダウンロードできる（ここを宣伝につかっていいのだろうか）。

ほかにも、今回参加できなかったが、東日本大震災についての特別ワークショップや、神経科学、自己制御、教育や消費者行動まで多岐にわたるワークショップがあり非常に充実した大会だったと思う。それだけ魅力的な発表が並列すると、不可避に「見たいが見られない発表」が多くなってしまったわけなのだが、できるだけ多くの発表を見られるように最大限の工夫と配慮をしていただいた吉田先生をはじめとする大会準備委員の方々には本当に感謝したいと思う。逆に、どこまでハードルが上がるのか社会心理学会、と思わなくはないが、来年の大会もいまから楽しみである。

（しみずひろし・広島大学）

印象記 2

澤海崇文

今回の大会は、前日まで日本心理学会大会が開催されたのですが、1 日目の朝から既に多くの会員の方々がいらっしゃって、本学会の人気というものを改めて感じました。また、2 日間を通して非常に充実した時を過ごすことができ、大会の運営に関わったすべての方々に、この場を借りてお礼申し上げたいと思います。

今回の大会は主にポスター発表の会場をふらふらと回っていたのですが、どの発表もとても魅力的でした。ポスター発表は全部で 4 セッションあり、「すべての発表に目を通そう！」と意気込んでいたのですが、体力的な限界も近付いてきて、後半に近づくほど脚が休憩室に向いていたのは認めざるを得ません。ポスター発表の内容については詳細を省略いたしますが、論文集を見てわかりますように、多くの発表は示唆に富み、より一層の発展が期待されると感じました。もちろん口頭発表も、論文集を眺めているとたくさんの興味深い研究があり、足をあまり運びに行かなかったことを後悔しております。

私はというと、初日の最初のセッションに、学習院大学の藤井氏と共同で実施した実験をポスター発表しました。潜在連合テスト（IAT）を用いてシャイネスを測定するという試みを連名で発表しましたが、多くの方々と熱い議論を交わすことができ、とても有益なご意見もいただけましたし、我々にとって大きな刺激となりました。

初日の夜の懇親会は、名古屋大学から電車で移動し、メルパルク名古屋という格式高いホテルの宴会場で行われました。たくさんの会員の方々が参加なさっており、私も混じって名古屋のグルメに舌鼓を打っておりました。特に、名古屋名物のひつまぶしと味噌かつは行列ができるほどの人気で、これを食べてこそ「こりゃーうみゃー」と言える権利が与えられるのかもしれません。私のようなペーペーの大学院生が超重鎮の先生方に話しかけられる場所は、お酒の勢いを借りられる懇親会しかないのかもしれません。懇親会というのは、人脈を広げるのには最適の場所なのだと再確認いたしました。今回の懇親会でも、非常に多くの方々がお互いに親睦を深めていったのだと思います。

さて、今大会のメインイベントといえば、やはり初日の大会準備委員会企画シンポジウム「社会心理学における社会とは何か？」と、2 日目の広報委員会・大会運営委員会企画シンポジウム「東日本大震災を乗り越えるために：社会心理学からの提言」ではないでしょうか。この印象記では残りのスペースで後者のレポートをしようと思います。東日本大震災によって、地震そのものだけでなく、続く大津波と放射能漏出事故という未曽有の危機を経験することになりましたが、そのような状況で社会心理学から何か貢献や提言ができないだろうか、という趣旨で開催されました。三浦麻子先生が司会をお務めになり、3 名の話題提供者、1 名の指定討論者によって構成されていました。

まず、1 人目の話題提供者である飛田操先生は福島大学に所属しておられ、先生自身、被災者としての経験もお持ちであるため、被災者からの視点を取り入れた発表はかなり興味深いものでした。例を挙げると、被災者にとって食堂で座る際にどのような席を選ぶべきなのか、見当がつくでしょうか。飛田先生によると、それはテレビが見られる所であり、震災関連の情報を素早く仕入れることができるからです。このように、比較的大きな被害を受けていない我々にとっては、思いもよらないような考えを拝聴することができ、とても新鮮でした。また、社会心理学の役割が発表の中で触れられていて、わかりやすく 3 つにまとめられていました。まず、たとえこのような被災状況下であっても、社会心理学者は自分の研究を推進していくことが大事だと飛田先生はおっしゃっていて、「研究者」としての社会心理学者の役目を果たすことが大事なのだと感じました。2 つ目は、震災に負けないくらいの強い人材が必要であり、学生の教育や有用な人材の育成の必要性が叫ばれていました。これは「教育者」としての社会心理学者の役目に当たるものだと思いました。最後に、本学会の広報委員会を中心として開設された特設サイトに代表されるように、情報を発信していくこと、いわゆる「発信者」としての役目を果たすべきだという内容でした。以上のように、当事者としての意見も織り込まれていて、私だけでなく多くの聴講者を引きこんだに違いありません。

次に、信州大学の辻竜平先生が、中越地震を通じてネットワークや信頼感がどのように変化したのかというテーマで登壇なさりました。多くの被害をもたらした中越地震が起きた後には、友人や近所の人などとのネットワークが広がり、信頼感も変化するという結果でした。興味深いのは、被害の大小によって一般的信頼への影響が変わるというものです。つまり、被害が小さい地域では震災後に信頼が上昇することが多かったのですが、被害が大きい地域では逆に個人間の利害関係などにより信頼が低下することも示されていました。このように、パネル調査は震災による影響を簡潔にかつ見やすく提示してくれ、東日本大震災でも一貫した結果が見られるのかどうか知りたいところです。

3 人目は同志社大学の中谷内一也先生が津波についての話題を提供していらっしゃいました。「アンカリング・ヒューリスティクス」と「集合行動」の分野から研究に取り組まれており、津波に関しての留意点を挙げていらっしゃいました。具体的には、人が津波に関して安全であると思うレベルが甘く、低い津波でも十分に危険であるということを住民に伝えるべきであるということ、また、津波が襲ってきた際には、日常的な規範を切り捨て、ひたすら各自で高台を目指して走るべきであるということが重要なメッセージであるように見受けられました。津波を経験したことがない我々にとって、いざという時のための予備知識を与えてくれました。

最後に、国際高等研究所の木下冨雄先生が災害に関する研究の大きな枠組みを呈示していらっしゃいました。災害研究を被災支援やリスク認知などいくつかの分野に分類なさっており、俯瞰的に災害研究を見つめなおすことができたといえます。

このように興味深いシンポジウムでしたが、時間の制約上、フロアから質問を受け付けることができなかったようです。とても素晴らしい発表内容から構成されたシンポジウムですが、時間が許せばフロアから多大な質問やコメントがあふれ出てきたのではないかと思われます。

ここでは紹介しきれなかった発表も大いに興味を引くものがありましたし、2 日間とも有意義に過ごすことができました。研究だけでなく、人との関わりも楽しむことができましたし、さらには、懇親会や休憩室でのおもてなしは大食漢の私にはたまらないサービスでした。この場において、重ねてお礼を申し上げます。

（さわうみたかふみ・東京大学）

■第 52 回大会実施概要報告

期日：2011 年 9 月 18 日～19 日

会場：名古屋大学東山キャンパス

準備委員長：吉田俊和（名古屋大学教育発達科学研究科）事務局幹事：北折充隆（金城学院大学人間科学部）、原田知佳（名古屋大学教育発達科学研究科）

1. 参加者数：707 名　（予約参加者 482 名、当日参加者 220 名、招待参加者　（名誉会員等）　5 名）
2. 発表件数：413 件　（発表申込件数 415）
3. 発表取り消し：2 件

口頭発表　07-01　杉浦仁美・坂田桐子（広島大学）外集団卑下を規定する要因の検討－社会的支配志向性に着目して－／ポスター発表　P04-58 砂谷由里（明治学院大学）心理社会的問題を抱えた青少年のインターネット利用の効果に関する再検討－自傷・自殺念慮を抱えた青少年に焦点をあてて－

2011 年度日本社会心理学会賞

第 13 回選考結果のお知らせ

■受賞者

〇優秀論文賞

『ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減方略：代替思考の内容に注目して』田戸岡好香・村田光二（第 26 巻 1 号）

ステレオタイプ抑制に伴うリバウンド効果の仕組みを明らかにしようとした研究。現象を着実に抑えながら、実験を積み重ねることにより基礎過程を解明していくという方法の確かさに加え、論文全体の一貫性など、その完成度が高く評価された。

〇奨励論文賞

『地域コミュニティによる犯罪抑制：地域内の社会関係資本および協力行動に焦点を当てて』　高木大資・辻竜平・池田謙一（第 26 巻 1 号掲載）

社会関係資本の概念を軸に、地域の犯罪防止効果という現実的な問題に正面から取り組んだ研究。階層的なデータ分析を始め新たな手法を丹念に用いた斬新性や、忍耐強い研究姿勢が高く評価された。

『共感性形成要因の検討：遺伝-環境交互作用モデルを用いて』　敷島千鶴・平石界・山形伸二・安藤寿康（第 26 巻 3 号掲載）

双生児研究という枠組みを社会心理学の分野に適用し、遺伝と環境の交互作用という遠大なテーマに挑んだ挑戦性が評価された。モデル検証のためのアプローチ方法も丹念になされており、この分野における一つの模範となる研究。

〇出版賞

『文化心理学〈上・下〉―心がつくる文化、文化がつくる心』　増田貴彦・山岸俊男（著）培風館

著者たち自身の研究からの最新データを引用しながら、「心の文化差の謎」に果敢にアプローチした功績が評価された。専門的な内容と教科書的な構成とのバランスに優れ、広い層の読者に長年にわたって関心を持って読まれていく可能性を持っている。

〇選考委員会

委員長：唐沢 穣

委員

理事：安藤玲子、下斗米 淳、高橋伸幸、箱井英寿、松浦 均、森 津太子

会員：大坪庸介、長谷川孝治、藤原武弘、稲増一憲

■受賞者の声

優秀論文賞を受賞して

田戸岡好香

この度は、日本社会心理学会優秀論文賞を賜りまして、光栄に感じております。お忙しい中、拙稿を読んでいただいた選考委員の先生方に感謝を申し上げます。

本研究は、未だ根強く残る偏見やステレオタイプを適切に避けるにはどうすればよいか、という研究関心に対して、社会的認知研究の観点からアプローチしたものです。何かを「考えないようにしよう」とするほどその対象を意識してしまう、といったことを誰もが一度は経験したことがあると思います。それと同様に、「偏見の目で見てはいけない」と思うほど皮肉にも相手を色眼鏡で見てしまう、ということがこれまでの研究で示されてきました。本研究では、このリバウンド効果と呼ばれる現象が生じるメカニズムをふまえた上で、その解決法を検討していこうと試みたものです。学部時代から、偏見や差別といった社会的問題に強く関心を抱いており、どうやったら解決できるのかという疑問を持っていました。そんな中、こうした現象がなぜ生じてしまうのかということを精緻に検討できる社会的認知研究に出会い、ステレオタイプが生じるメカニズムの解明を通して、社会的問題の解決に貢献したいと考えるようになりました。日本におけるステレオタイプ研究の難しさを実感する中で、試行錯誤がありつつも、学部時代から一途に（ある意味しつこく）本テーマに取り組んでまいりました。本賞の受賞は、そうした努力を認

めてもらったようで大変嬉しく思います。また、社会的認知研究では初めての受賞だということを伺っておりますので、この分野への関心の高まりに拙稿が少しでも貢献できれば幸いです。

本論文は私の修士論文を加筆・修正し、初めて学術雑誌に投稿した論文でした。計画の立案や実験実施においては、ゼミの諸先輩や同期、後輩に多くのアドバイスと協力をいただきました。初めての論文執筆ということもあり、右も左もわからない状態から、投稿論文まで仕上げることができたのも、多くの方々のご指導と励ましがあったからです。そういった意味で、私自身は研究室全体で本賞をいただいたように感じております。また、本論文の査読者の先生方には丁寧な審査を通じて、有益なコメントをいただきました。執筆にあたりお世話になった多くの方々に、この場を借りて心からお礼を申し上げたいと思います。

受賞当日、これまで厳しくも温かく見守ってきてくださった指導教授から「今日が田戸岡の人生のピークだな（笑）」と、いつものごとく叱咤激励をいただきました。いい意味で期待を裏切れるよう、今後も真摯な気持ちで研究に取り組んでいきたいと思います。この度は本当にどうもありがとうございました。

（たどおかよしか・一橋大学大学院）

奨励論文賞を受賞して

高木大資

このたびは、社会心理学会奨励論文賞という大変名誉な賞を賜りまして、誠に光栄に存じます。マルチレベルの分析手法を用いて、社会関係資本という地域の要因でそこに住む人々の犯罪被害を予測する本研究のアプローチは、欧米での犯罪学、社会学、公衆衛生学などではすでに多くの研究の蓄積があります。わが国においては、ここ数年でようやく緒に就いてきたという状況ですが、日本のデータを用いてそれを検証した本研究が日本社会心理学会において賞を賜ったということは以下のような点で大きな意味を持つと考えております。

これまでは犯罪の減少というものが重要な社会的課題であると認識されつつも、社会心理学の研究の俎上に乗り難いためにそれを研究対象とする社会心理学者の方々が少なかったという状況がありました（実は、私が拙著を社会心理学研究に投稿する際も、本研究が「社会心理学的」であると認めていただけるかどうか不安に感じておりました）。日本の犯罪研究は「ガラパゴス化」していると言われることがありますが、そのような中で、拙著が日本社会心理学会という権威と伝統のある学会から賞を賜ったことは、この分野が社会心理学の研究対象として認めていただけたのだと大変うれしく思うのと同時に、今後の研究の方向性に対しても大きな勇気を持つことができました。本研究が他の研究者の方々や学生の方々のこの分野への研究関心を高める一助になれば幸甚の至りです。

さて、本論文は私が明治学院大学大学院修士課程に在学中に書いた修士論文の分析結果をもとに執筆したものです。当時、将来研究者になりたいという夢を抱いたものの、「自分は果たして研究者に向いているのか」「自分の力で何かをきちんと研究することができるのか」と、海の物とも山の物ともつかぬ自分に疑問を感じながら、それでも無我夢中で研究を行ったことをよく覚えています。その時の研究がこのような形で評価していただいたことは非常に感慨深いものがあります。これを機に初心に立ち返り、今後もより一層の努力をしていきたいと思います。

最後になりますが、本論文は、共著者である前指導教員の信州大学の辻竜平先生、現指導教員の東京大学の池田謙一先生の熱心な御指導がなければ完成し得ませんでした。また、三名の査読者の先生方の貴重なご意見からは非常に多くのことを学ばせていただきました。心より御礼申し上げます。加えて、お忙しいなか調査のアンケートに回答してくださった皆さま方、有益なアドバイスをくださった明治学院大学心理学研究科および東京大学社会心理学研究室の方々にもこの場を借りて心より感謝申し上げます。

（たかぎだいすけ・東京大学大学院）

奨励論文賞を受賞して

敷島千鶴

このたびは名誉ある第１３回日本社会心理学会奨励論文賞を私どもの研究論文にいただくことができ、たいへん光栄に存じます。ご審査くださいました先生方に厚くお礼申しあげます。

今回の受賞の対象となりました敷島、平石、山形、安藤の共著論文では、青年期以降の社会性の個人差の源泉に関して、幼少期の親子関係の親密さを重要視する従来の社会化論と、家族で共有する家庭環境の影響はないと主張する行動遺伝学研究との間に生じている大きな隔たりを、「遺伝―環境交互作用」という立場から説明することを試みました。具体的には、共感性のきょうだいの類似性を一卵性双生児と二卵性双生児の間で比較することにより、背後にある遺伝と環境という個人差を形成する要因を解明することができますが、こうした要因の影響力は、親子の絆の強さによって調整されるという仮説を検証しました。その結果、親子の絆が強いと感じる個人は、その家庭の影響を多く取り入れるが、普通と感じる個人は、自分の遺伝的素因や家庭外の環境の影響をよりどころにするということ、つまり親子の絆の強弱が、共感性を形成する要因に対し、交互作用を生じさせていることを明らかにすることができました。このことは、従来の社会化論と行動遺伝学の知見という、一見相容れない２つの主張のどちらも、１つの調整変数を考慮することによって、説明可能となることを示唆します。

「遺伝の影響は無視できない」と遺伝の重要性ばかりを主張しても、「遺伝は厄介だから考えない」とブラックボックスに閉まっておいても前進はありません。「遺伝と環境の両方が大事」と折衷論的立場に収まっていても説明になりません。どのような状況で遺伝の影響が多く発現し、どのような環境にあれば家庭環境の影響が顕在化するのか、この仕組みについてエビデンスを呈示していくことが私たちの今の仕事であると考えています。今回得られた結果は一例に過ぎず、他の形質についても追試を重ねてまいります。

私事で恐縮ですが、私たちの行動遺伝学研究の論文は、大学院在学中の 2007 年にも賞をいただき、その時のごあいさつに、「行動遺伝学研究は、社会科学の領域ではまだまだ市民権を得るには至っていないが、取り組むべきテーマは山積しており、これからも新しい問いを立て研鑽を積んでいきたい」と、新たな決意と野望を表明させていただきました。以来、頂戴した大きな励みと重い責務を背負いながら研究を続け、

2010 年、博士論文を提出し学位をいただき、2011 年、その中心部をまとめて投稿させていただいたのが今回の受賞論文であることを振り返りますと、感激はひとしおです。私たちの研究に、ご指導とご理解をくださいました皆々様に対し、感謝の気持ちに堪えません。

双生児研究は、あたりまえですが、双生児の皆様のご協力があって初めて成立します。日本の人口のおよそ 1~2%と稀少な双生児を見つけ出し、研究協力を依頼し、登録してもらい、追跡していくという、一連の作業は非常に大がかりなものになります。ご協力者の負担もさることながら、調査を実施する側にも膨大なコストを要します。そのような貴重なプロジェクトの中で、素晴らしい同志のメンバーと共に研究に参加させていただける幸せを強く感じています。改めまして、この場をお借りして、私たちの研究を推進していくにあたり、日々お世話になっております大勢の方々に心より厚くお礼申しあげます。

（しきしまちづる・慶應義塾大学）

出版賞を受賞して

増田貴彦

このたびは、2011 年度日本社会心理学会出版賞を賜り、誠に光栄に思います。選考いただきました諸先生・日本社会心理学会の関係者の皆様に深く御礼申しあげます。授賞式に出席し是非にも御礼申し上げるべきにも関わらず、カナダの大学の教育システムの事情で日本に帰国することがかなわず、誠に残念に思っております。

本書は、文化心理学という新しい研究分野のこれまでの成果を包括的に紹介すると同時に、２人の著者が、自らの研究成果に言及しながら、それぞれ異なる立場から研究結果を解釈を加え、さらに文化心理学の今後についての議論をするという構成でした。特に力を入れたのは、私・増田貴彦が文化心理学者として今後の展望を議論する一方で、共著者の山岸俊男が、文化心理学の通常の議論から一歩離れて、社会科学者としての視点からの展望を論じることで、いま何がホットな論点であるのかを焙り出そうとした試みでした。

もちろん、こうした構成は、教科書に複雑な構成を望んでいない読者の方々には些か不親切になるのではないかと危惧もありました。しかし、文化心理学は、その成果について批判を含め様々な議論があることを積極的に示すことで、文化心理学に健全な議論の場が広がっていることを若い人たちに感じ取っていただきたいという思いで、あえてこうした構成をとりました。

こうした決して一般的ではない教科書になったにもかかわらず、本書が日本社会心理学会より理解・評価いただきましたことは、私にとって大きな励みになりました。また、文化心理学という若い分野を社会心理学の一領域として認めていただけたということは、私を含め、今後この分野を学ぼうとしている若手研究者・大学院生・大学学部生にとりましても、大きな支えになるものと思います。

現在、欧米の社会心理学ではデータ収集と発表についての誠実性・健全性をどのように確立するのかが議論されております。この賞の名に恥じることのないよう、これからも信用のおけるデータを地道に収集・発表し、精進していく所存でございます。

最後になりますが、文化心理学者としてのトレーニングを積む機会を与えてくださったミシガン大学心理学リチャード・ニズベット教授、フィービー・エルスワース教授、リチャード・ゴンザレス教授、北山忍教授、また本書の内容を練り上げるにあたり、著者らのディスカッションに参加して下さった北海道大学大学院文学研究科行動システム科学講座の皆様、草稿を読んでコメントを下さったアルバータ大学心理学部の皆様、本書の企画・校正に多大な尽力をいただいた培風館の担当の皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

（ますだたかひこ・アルバータ大学）

2011 年度国際学会シンポジウム企画の補助対象者が決まりました

「国際学会シンポジウム企画補助金制度」は、学会活動の国際連携・交流をはかるため、海外や国内で開催される学会で、国際的なシンポジウムを企画し、オーガナイズした会員に対して、シンポジウムに関わる経費の一部を補助する制度です。2011 年度は 2 件の応募があり、それらについて、渉外担当常任理事・唐沢かおり（東京大学）を委員長とし、浦光博（広島大学）、池上知子（大阪市立大学）、北村英哉（東洋大学）の 4 名にて選考委員会を構成して慎重に審議いたしました。その結果、応募の２件に対して補助を行うことに決定いたしました。各応募企画の内容は、次の通りです。

＜企画１＞

企画者：吉澤寛之（岐阜聖徳学園大学）

企画題目 : Social Psychological Perspective on the Development of Antisocial Youth.（青年における反社会性の発達への社会心理学的視点）

学会名・開催場所 : 日本社会心理学会第 52 回大会（名古屋大学）

シンポジウム構成メンバー : 吉澤寛之　（岐阜聖徳学園大学、企画者・発表者）、Gini Gianluca（Univesita degli Studidi Padova、発表者）、氏家達夫　（名古屋大学、指定討論者）、高井次郎（名古屋大学、司会者）

＜企画 2＞

企画者：池田満（国際基督教大学）

企画題目 : Professional Issues in Role Conflict for Community Psychologists as Evaluators in the US and Japan.

学会名・開催場所 : 13th Biennial Conference of the Society for Community Research and Action　（シカゴ、U.S.A.）

シンポジウム構成メンバー：池田満　（国際基督教大学、企画者・司会者・発表者）、笹尾敏明（国際基督教大学、発表者）、池田琴恵（お茶の水女子大学、発表者）、Jason Katz　（University of South Carolina、発表者）、Abraham Wandersman　（University of South Carolina、指定討論者）

2011 年度大学院生海外学会発表支援対象者が決まりました

「大学院生海外学会発表支援制度」は海外で開催される国際的な学会で、単独または共同研究の責任者として口頭発表またはポスター発表を行う会員に対して、その渡航費の一部を補助する制度です。2011 年度については、18 件の応募がありました。それらについて、渉外担当常任理事・唐沢かおり（東京大学）を委員長とし、竹村和久（早稲田大学）、村本由紀子（東京大学）、藤島喜嗣（昭和女子大学）の 4 名で選考委員会を構成し、慎重に審議いたしました結果、次の 4 名の方々を支援対象とすることに決定いたしました。

支援対象者および発表学会

田戸岡好香（一橋大学大学院社会学研究科 D3）: The 16th European Association of Social Psychology

渡辺匠（東京大学大学院人文社会系研究科 D1）: SPSP 2012 Annual Meeting

徐侑里（名古屋大学大学院環境学研究科 M2）: The 9th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology

稲葉美里（北海道大学大学院文学研究科 M1）: The 23rd Annual Meeting of the Human Behavior and Evolution Society

訃報　田中國夫名誉会員

田中國夫先生　追悼の辞

藤原武弘

長年にわたり社会心理学会を牽引されてきた田中國夫先生（関西学院大学名誉教授）が、2011 年 5 月 25 日老衰のため逝去された。享年 85 歳。1960 年第 1 回、1969 年第 10 回、1980 年第 21 回、1990 年第 31 回大会委員長を 4 度務められた。研究業績として 31 篇の著書、91 篇の学術論文を残されたが、代表作は『日本人の社会的態度』（誠信書房）であろう。その内容を一言で述べるなら、因子分析を用いての社会的態度間構造の解明。「莫大な資料の統計的処理は電子計算機の発達しなかったころには苦痛に満ちた作業であった」と「まえがき」で述懐されているように、因子分析の計算に入る前に必要な相関行列を計算するだけでも気の遠くなる作業である。瞬時に因子分析の計算ができる現在では想像がつかない遠い昔のことになった。私が学部学生の頃、田中先生がものすごい速さでタイガー手廻し計算機を使われていた姿を垣間見たことがある。先生のお師匠である古賀行義先生も第二次世界大戦前に因子分析を用いて態度の研究をされていた。まさに田中先生は古賀先生の直系の弟子である。古賀先生はピアソンやスピアマンのいたロンドン大学に留学されておられたこともあり、歴史上の偉大な学者と間接的だが自分も繋がりを持つことにささやかな誇りを感じる。余談になるが古賀先生は 1937 年に日本心理学会第 6 回大会で逆手の因子分析（Q 技法）を提唱され、性格を表す言葉、浮世絵の顔、筆跡といった刺激で個人間の因子負荷行列を計算されている。残念なことに 1935 年ほんのタッチの差で「Nature」にスティーブンソンが Q 技法の論文を先に発表していた。スティーブンソンはスピアマンの最後の助手で、このあたりにも歴史の因縁みたいなものを感じる。

私が田中先生と出合ったのは 1965 年、先生が 41 歳、私が 19 歳のとき、「社会心理学」の講義を通じてである。田中先生は笑いをとるために、落語、漫才、漫談を随分研究され、ボケとツッコミを 1 人で演じる、まさに天才肌の講義であった。興奮した良く通る大きな声、歯切れの良い口調、ダイナミックでエネルギッシュな身体の動き、ややオーバー気味のジェスチャー。観衆を引き込み覚醒させてゆく異才な能力や教祖としてのカリスマ性を感じられずにはいられなかった。即座に私は田中教というか、田中饗のシンパになっていた。ところが憧れて田中ゼミに入ったものの、田中先生は 3 ヵ月後海外留学のためアメリカに神戸港から旅立たれた。田中ゼミのメンバーは別の心理系のゼミの居候となった。一年後社会心理学の最新の成果を携えミシガン大学での留学から帰国された。卒業論文の参考文献として私に手渡されたのは、フィシュバインの態度に関する論文だった。その論文と悪戦苦闘しているうちに、やがて私は社会心理学という学問の面白さに牽かれてゆき進学を決意した。

恩師である田中先生からあまりにも沢山のことを学んだ。社会心理学の理論や方法といった学問上の知識のみならず、それ以上に、テニスやスキーといったスポーツの技術、おいしい料理や店といったグルメ情報、論文やデータ整理の仕方、情報整理のための文房具、カード、ファイルについての情報の技術等。師はプロフェサーであると同時に、スポーツマンでもあり、グルマンでもあり、テクニシャンでもあり、情報通でもあった。私にとっては人生の万事について師匠であった。最後に「人生パチンコ玉説」は先生の口癖だった。人生はものの弾みで、局面、局面でどこにどう弾むかは分からないが、弾んでいった場所でそれぞれ一生懸命努力することが大切だという教えである。先生は今どこに弾かれ、何をされているのだろうか。合掌。

（ふじわらたけひろ・関西学院大学）

「東日本大震災に際して社会心理学者に何が出来たのか／何ができるのか」

個人の貢献と後悔と今後と

藤島善嗣

東日本大震災後、私は、自らのブログで「非被災地のための社会心理学」という特集を組み、提言を発信する一方で、広報委員会による東日本大震災復興支援サイトの運営に 2 ヶ月ほど携わりました。だけど、告白します。私の関わりは受動的でしたし、誤りを犯して社会心理学者の地位を貶めるようなこともしました。何よりも、正直、上記の活動が役に立ったか、確信を持てないでいます。

私が情報発信を始めたのは、2011 年 3 月 16 日でした。ごく一部の社会心理学者が情報発信をはじめた一方で、科研費支出の余剰金を震災復興に回せないかという議論がなされていました。私は、Twitter でその様子を見ており、「自分を含め社会心理学者は何もできない」と発言していました。この発言を見た何人かの先生から「とにかく何かしなさい」との返信をいただきました。お世話になっている先生方の発言でしたから、無視はできませんでした。恥ずかしながら、これがきっかけです。自発的にではなく、受動的に動いたのです。そして、この中途半端さがすぐに誤りを生みました。

最初に書いたブログ記事で、私は、恥ずかしい誤りを犯しました。高校レベルの確率問題を間違えたのです。ブログは軽く「炎上」しました。社会心理学者が恥ずかしい誤りを犯したと話題になりました（皆様、申し訳ありません）。その結果、誤りを指摘

してくださった方へのお礼とお詫び、記事修正に追われました。記事削除も考えましたが、自戒のため削除しませんでした。結果的にこれは適切だったと思います。議論の様子を残すことになったからです。

そもそも最初から、震災関連の提言を発信することに恐怖を抱いていました。私が用意できる提言は、過去の実験結果を現実場面に適用したものでした。これはあくまで自分の見解に過ぎず、適用を正当化する証拠はありませんでした。証拠もなく、もっともらしいことを語るのは、望ましいことではありません。また、誤りを犯す可能性もありました（実際に犯しました）。今から思えば、このときの恐怖は、結局、責任をとることへの恐怖でした。日頃、学生たちに研究知見の適用例を時におもしろおかしく示し、論文の考察では真面目ぶって知見の応用を語るのを考えると奇妙な話です。日頃の自分の無責任さが分かります。

ブログ記事配信直後、広報委員会によって東日本大震災復興支援サイトが立ち上がりました。当時、委員の一人だった私は、その運営に携わりました。予算もなく、適切な運営形態もわからないままの手探り運営でした。広報委員は本当によく働いたと思います。年度末で比較的時間を確保しやすかったこともあるかもしれませんが、広報委員の間で一日に数十通の打ち合わせメールが飛び交い、寸暇を惜しんで作業が行われました。幸い、広報委員会以外にもご協力いただける先生がたくさんいて、コンテンツは日々充実したものとなっていきました。

それでも思うことがありました。「事が起きる前にこの活動をしていれば」だとか、「もっと時間をかけることができれば」だとかいったことです。ボランティアを含めて30人程度が懸命に働いたわけですが、できることは限られていました。一定の貢献をしたとも感じますが、事の大きさに対して我々のインパクトは小さく、自己満足の域をでないのではないかとも感じました。自虐的過ぎると言われるかもしれませんが、携わった一個人の率直な実感です。

社会心理学者は、あの震災の時、どうすべきだったでしょうか、もしくは今後どうすべきでしょうか。思うに、社会心理学者は、社会と関わりを持つ以上、社会に語りかけなければいけません。ただし、個人の意見は、どうしても偏りますし、誤ります。この偏りと誤りを修正する仕組みが必要だと思います。そして、何よりも日頃からの対応が必要です。いざというときに示すべきものは、一生懸命な姿ではなく、暫定的としてもすぐ示せる提言と貢献です。これまで感じたこれらの後悔を将来に活かすことを考えると、およそ３点に集約できると思います。

1 点目は、根拠に基づいた積極的な意見表明をすべきだということです。私たちは、毎回のように学会で自分の研究の成果を報告し、自らの意見を主張しています。これは学会という閉じたコミュニティ内でのことですが、日頃から学会の外にも積極的に語りかけるべきです。語りかける相手は、問題の当事者だけとは限りません。周囲を取り巻く人たち、つまり、潜在的に支援する側の人たちにも提言できること、提言すべきことは多々あると感じます。

もちろん根拠となる研究データは必要ですし、引用だとしても何らかの形で必ず示すべきだと思います。残念なことに手持ちの知見が目の前の問題とは直接関連しないかもしれません。その場合でも、問題が起きた今がどのような状況であるか、自らの理論的立場から見解を述べるべきだと思います。知見が適用可能かについては、新たに証拠を示す必要がありますし、それゆえに意見表明することに慎重であるべきだとは思います。が、何も語らないのも社会心理学者の存在意義を自己否定しているように感じます。

2 点目は意見の集約と議論の場の提供です。私たちが行う提言は、あくまで意見であって、過去の事実や（あるとすれば）「真実」とは異なります。そのため、異論が存在する可能性が常にあり、それらを突き合わせ、議論をすることが必要となります。時に紛糾するかもしれませんが、そのような混沌も示すべきだと思います。確たることが言えないのは、社会心理学者の地位向上には不利に働くかもしれませんが、社会にとっては問題の複雑さを理解する機会となります。また、議論を示すことで、提言をする主体が、一個人ではなく、研究者コミュニティ全体になります。結果、責任が分担されこともメリットの一つだと考えます。震災復興支援サイトは、社会心理学者の提言を集約した点で重要な機能を果たしたと思います。しかし、異論と研究者間の議論を示せているでしょうか。

3 点目は定期的に議論をまとめて報告をすることです。すべての議論が尽くされるとは到底思えませんが、それでも暫定的な見解は示せるはずです。このとき報告すべき相手は、日本社会心理学会内ではなく、学会外であると思います。先日行われた第52回大会では、震災シンポジウムが行われました。この模様はネット配信され、現在も視聴が可能です。この試みは、東日本大震災に関する社会心理学者の見解を学会外に示した数少ない事例です（残念ながら議論は示されていません）。このような試みを質、量ともに増やすことが今後求められます。

今回の「失敗」を期に、社会心理学者の社会貢献が増えることを祈ります。また、それを可能にする学会レベルの仕組み作りが進むことを切に希望します。

（ふじしまよしつぐ・昭和女子大学）

若手会員、声を上げる

自分の研究を伝えたい、仲間を募りたい、ネットワークを拡げたい、 教育について語りたい、と考えている会員はたくさんいるはず。社会心理学会の若手会員の方々にそうした機会を提供するのがこのコーナーです。今号では3つの声を寄稿いただきました。会員全員に届くメディアとして会報を どんどん使っていただければと思います。

（次ページに続く）

【若手会員、声を上げる】
「“隠れ進化心理学”のすすめ」
（森本裕子・総合研究大学院大学）

このたび、社会心理学会の会報という貴重な誌面をお借りして、進化心理学的な視点から研究をする仲間を増やそうと企てました。進化心理学と聞いて、「自分の研究とは無関連だ」と思ってらっしゃる方も多いのではないでしょうか。私もはじめはそう思っていました。その後、「いや、無関連ではない」と意見を翻したわけですが、それについて話す前に、まず簡単に進化心理学のアイデアについてお話ししたいと思います。

地球上に現存するあらゆる生物は、ひとつの例外もなく、「生殖年齢まで生き、子を生した」生物の子孫です。生殖年齢以前に死んだ生物の子孫も、子を生していない生物の子孫もいません。ということは、私たちの先祖は、みんな、生存や繁殖に役立つなにかしらの性質を持っていただろうと推測できます。そして、そうした性質が遺伝するならば、私たちも、先祖と同じように、生存や繁殖に役立つ性質を持っていると考えることができます。以上。

進化心理学の背景にあるのは、たったこれだけのアイデアです。もちろん、どうやって「役立つ」と証明するんだ、とか、先祖のいた環境と現在の環境は違うのでは、とか、関連するややこしい議論は山ほどありますが、基本はこれだけ。「私たちは、生存か繁殖に役立つ性質を持っているだろう」、あるいは、「私たちの持つ性質は、生存か繁殖に役立つ側面があるだろう」というのが核となるアイデアです。

さて、社会心理学は、このアイデアとどのように付き合えばよいのでしょうか。

たとえば、私たちは決して一人では生きていけず、必ず誰かと仲良くなろうとします。これまでの社会心理学では、「人と仲良くするのは、親和動機を持っているからだ」という説明がされていたとしましょう。そこへ進化心理学者がやってきて、「人と仲良くするのは、そうすることで生存や繁殖に役立つからだ！」と言い出します。面倒だなあと感じるお気持ち、とてもよくわかります。でも、よく考えてみると、親和動機によって人と仲良くすることと、それが生存や繁殖に役立つことは、別に矛盾しないのです。

冬になると、渡り鳥が越冬にやってきます。彼らは、「なぜ」海を渡るのでしょうか？「寒い冬を乗り越えるためだ（生存に役立つからだ）」という説明もできるでしょうし、「体内のホルモンの働きによって渡りたい動機が強まるからだ（渡り動機によるものだ）」とも言えるでしょう。また、発達のどの段階で渡りに必要な機能が獲得されるのか、という発達的な視点からの説明も可能かもしれません。これらの説明は、矛盾なく成立します。人と仲良くするのは、親和動機によるものでもあるし、生存に役立つからでもあるし、発達によって身につくからでもあるのです。

さて、そうすると、それぞれの分野で独立して、それぞれの説明をしていれば良い、ということになりそうです。それはもちろんその通り、なのですが、私がここで提案するのは、進化心理学的な発想を社会心理学の研究に取り込んでしまおう、言い換えれば、利用してしまおう！ということです。

ある研究について紹介しましょう。一般に、空間認知については男性の方が優れていると言われています。これを進化心理学的に説明すると、「男性は長い間狩猟に携わってきたため、移動しながら獲物をつかまえるのに役立つ空間認知が優れているのだろう」ということになります。では女性は？狩猟採集社会では、女性は主に採集にかかわってきました。そうすると、女性に必要なのは、移動しながら空間上の絶対的な位置を把握する能力ではなく、どこに果物が生るのか、どこでたくさん貝が採れるのか、採集場所とその目印を覚えておく――相対的な物体位置記憶――能力です。そして、実際、男性に比べて女性の位置記憶能力が高いことが、いくつかの研究によって示されています　（例えば、Silverman & Eals, 1992）。空間認知の中でも、女性の方が得意な分野がある、というわけです。私はこの研究のアイデアを知って、ずいぶん感動し、同時に、やられた！と感じました。確かに、うちの実家でも、物の位置を覚えているのは母であって、父ではありません。でも、「空間認知は男性が優れる」という思い込みのせいで、それは単に母が主となって片付けをするからであって、それ以上のものではない、と思い込んでいたのです。

親和動機の場合はどうでしょうか。人と仲良くしようとする親和動機が、生存のためのものであるなら、誰かの助けがなければ生存が危ない（たとえば気候が厳しかったり、財産が少なかったりする）場合に、親和動機が高まるだろうと推測できます。もちろん、他のテーマでも、同じように進化心理学の発想を利用することができるでしょう。

進化という観点を導入することで、それなしには得られなかったようなアイデアに行き着く――これが私の考える「進化心理学の利用法」です。進化心理学者になる必要もなければ、社会心理学的な説明を捨てる必要も、また、論文に進化的な話を含める必要もないのです。単に、アイデアを得るきっかけに使うだけ。これが私のおすすめする“隠れ進化心理学”というわけです。どうです、心惹かれませんか？

興味のある人はこちらをクリック、とURL でも載せたいところですが、残念ながら誘導できるサイトを持ち合わせておりません。実を言うと、「私に書かせてください」と手を挙げたときには、小さな研究会を開こうと思っていたのです。ところが、諸事情によりそれが叶わない状況になってしまいました。興味を持ってくださる方がいることを祈りつつ、入門書として、亀田・村田による「複雑さに挑む社会心理学」と、長谷川・長谷川による「進化と人間行動」を挙げて、本稿を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

【若手会員、声を上げる】
「若手研究者の特権について考える」
（及川昌典・同志社大学）

若手研究者たちの間で、ポスドク後ストレス障害（PDSD）という言葉が流行したことがあります。理想的なポスドク研究環境での任期が終了した後に、若手研究者がしばしば陥る深刻な不安状態を指す造語だそうです。ポスドク時代の記憶のフラッシュバック、現状への苛立ち、そして将来への焦りなどが、その主な症状とされます。それまでとは異なる研究環境に触れることは、積み上げてきた研究やキャリアに関する認識を少なからず揺さぶられる経験となるようです。訓練を受けた研究室での教えが、しばしばそのまま“研究観”につながる若手研究者においては、特にその傾向が強いように感じられます。

社会心理学会では、大勢の若手研究者たちがこれまでにない新たな試みに取り組んでいます。しかし、その活躍の背後には、あまり語られることのない様々な経験があるはずです。経験を重ねるほどに視野が広がり、より責任や洞察の深い研究者に仕上がっていくことは間違いありません。一方で、経験の浅い駆け出しだからこそ許される、幾つかの特権があるようにも感じられます。この執筆の依頼を受けたときに、ひらめいたことがありました。まさしく経験の浅い駆け出しのひとりとして、私が受けてきた特権について考えてみようではないか。ここでは、新しい経験への開放性、失敗からの学び、そして共同研究や情報発信に果たす役割などについて考えたいと思います。

ポスドク経験からの学び

若手研究者の特権の一つは、やはり新たな経験に挑戦する身軽さでしょう。学位取得後、私は日本学術振興会特別研究員（PD）として、アメリカとオランダでポスドク生活を送る機会に恵まれました。これは幾重にも幸運なことでしたが、この機会に飛び込めたことが、そもそも若手研究者の特権であったかと思います。

研究環境や職場を選ぶ際に、大切な要素はたくさんあります。いつ、どこで、何をするか？これらも、もちろん重要なことだと思います。しかし、経験の浅い者にとっては、“誰とするか”ほど重要なことはないと感じています。振り返ると私は、行く先々で素晴らしい人々との出会いに恵まれていました。

研究者のような創造的な仕事には、失敗や批判はつきものです。また、どんなに良い研究であっても、それが初めから手拍子で歓迎されることはありません。そうとは知りながらも、若手研究者には、批判的な論文審査や不採択の通知を直視することがなかなかできません。失敗から学び続ければ、いずれはこの悩みから解放され、不採択知らずの研究者になれる日が来るのでしょうか？ポスドク時代に出会った研究者たちとの交流は、このような若手研究者に特有の悩みを解消するにあたり大切な契機となりました。

想像とは異なり、第一線で活躍する研究者たちは、決して不採択通知や批判と無縁な研究者などではありませんでした。毎日のように送られてくる審査通知の内、少なくとも半分は不採択通知、門前払いのような通知も珍しくありません。しかし、彼らはそれを全く意に介しません。採択の可否を問わず、審査者からのコメントは同じように真剣に精査されます。ある研究者は、「どうすればScience論文が書けるようになるのか」という私の素朴な問いに対して、ウィスキーを片手にこんなアドバイスをしてくれました。

「研究が独創的であるほど、不採択率も高くなる。最終的にはJPSPやScienceに掲載された論文でも、色々な雑誌を巡ることも少なくない。論文は審査されるたびに確実によくなるから、どんな研究もいつかはどこかに掲載されるだろう。重要なことは、自分が心から面白いと感じる研究をすることと、批判を真剣に精査すること。それだけだよ。研究での貢献を諦めるなら、批判と無縁な生活を送ることもできるだろうけどね。」

本当に面白いと思う研究をするために、失敗や批判をしっかりと受け止めること。これは私のポスドク時代の最も大きな学びの一つでした。

共同研究

若手研究者が共同研究を行うことについては、様々な意見があると思います。自分自身の研究スキルや姿勢が定まらないうちに共同研究を行っても、かえって成長の妨げになるかも知れません。一方で、共同研究からは自分一人では思いもつかなかった新たな視点が得られることもあります。

現職の同志社大学において、私は自己意識の研究プロジェクトに参加する機会を得ることができました。この研究プロジェクトは、哲学、生命医科学、理工学、スポーツ健康科学など、分野の異なる専門家たちの研究メンバーで構成されており、『自己意識を実装したロボットの実現』という、SFのような目標に向けて盛んな意見や技術の交換がなされています。自分の専門からは縁遠いと思っていた分野が、実は心理学と非常に近い問題に取り組んでいることに気付かされることには新鮮な驚きがあります。このような場面では、まだ不確かな仮説や、異分野からの視点をつなぎ合わせていく大胆で柔軟な発想が求められます。自らの専門領域の看板を背負っていると思うと、無責任な発言はできません。しかし、このような制約のもとでも、比較的自由な発想や発言、また、まだ新しい知見に関する意見交換が許されることは、若手研究者ならではの特権であるかも知れません。研究言語の違いに互いに戸惑いながらも、共通の関心を持って新たな研究を計画していくことは刺激的な作業です。いつかはこれらの発想を、社会心理学の研究につなげられればと思います。

情報発信

Society for Personality and Social Psychology の第 12 回大会で基調講演を務めたベストセラーサイエンスライター、マルコム・グラッドウェル氏は、「科学者も研究知見を一般社会に伝える努力をすべきだろうか？それともジャーナリストにお任せすればよいだろうか？」という質問に対して、次のように応じています。「インタビューに応じてくださった研究者の方々の中には、深淵な基礎研究の知見を不用意に日常的な応用に結びつけることを好まない先生も大勢いらっしゃいました。これは無理からぬことです。しかしながら、先端科学には一般の読者からの大きな期待と関心が寄せられていることも、また事実です。」

研究知見を日常の身近な問題や社会現象に応用できることは、社会心理学の大きな魅力のひとつです。ブログやツイッターなどを通じて、自由な情報発信ができる時代になりました。先端科学の知見を一般社会に伝える役割も、あるいは若手研究者が、その特権を通じて果たせることの一つであるのかも知れません。

【若手会員、声を上げる】

「言語に関する研究会のメンバー募集」

（瀧澤純・首都大学東京、
澤海崇文・東京大学）

現在、言語に関する研究に関心がある若手の研究者が集まる研究会を発足させようとしています。言語に関しての研究に興味がある方に、ぜひメンバーとして加わっていただきたいと思っています。

この研究会の目的は、メンバーが共同で研究を計画・実施することです。若手研究者が集まり、メンバーにとって新しいテーマで研究を実施したり、得意とする分野を

提供し合ったりして研究したいと考え、この会を企画しました。”研究会のメンバーで研究について議論するだけでなく研究も共同で進めていく”という点が特色です。もちろん、メンバー同士で研究発表を行ったり、勉強会を企画したりすることも考えています。研究仲間を増やしたい方や、新しい研究に取り組もうとしている方に資する研究会にしたいと思っています。

また、研究会メンバーの研究領域も、なるべく幅広くなるようにしたいと考えています。研究テーマが言語に直接関係しなくても、言語に関連する手法や研究を行っていらっしゃるならば、ぜひ参加していただきたいと思っています。たとえば、プロトコル分析、テキストマイニングなどの分析手法を用いている方、意味プライミングのように言語や概念を実験操作に用いている方、質問紙における文章の表現に関心がある方など、多くの領域からの参加を募集しています。もちろん、言語の周辺領域、言語について直接関連するテーマで研究を行っている方の参加もお待ちしております。言語習得や言語発達に関心がある方、言語の音声・意味・文法に関心がある方、ノンバーバル・コミュニケーションに関心がある方、メディアのメッセージ発信と理解に関心がある方、比喩・皮肉・嘘・ユーモア・オノマトペ・ポライトネスのような言語行動に関するテーマに関心がある方も参加していただければと思います。これらのテーマについてこれから研究していきたいと考えている方にも、参加していただきたいと思っています。

研究会の開催日時や曜日は未定です。開催する場所は、関東近郊を予定しています。来月中に、最初の研究会を開催し、その後も定期的に集まりたいと考えております。興味がある方は、瀧澤 takizawa-jun[at]ed.tmu.ac.jp までご連絡ください。実りのある研究会になるよう、皆様のご参加をお待ちしております。

社会心理学会を支えていただいている方々（その２）

私たちの 学会を支えていただいている方々に、社会心理学会との関わりを含めて「自己紹介」をお願いしています。前号からはじめた連載で、今回から賛助会員社にお願いしています。

㈱マーケッティング・サービス

取締役会長　吉村春彦

弊社の概要

弊社は 1965 年（昭和 40 年）に設立された老舗の調査会社です。社員数 25 名、定期雇用者 30 名、年間売上 6 億円、日本マーケティングリサーチ協会に加盟している 150 社の中で中位の規模であり、大小織り交ぜ 1 年間に 300 本前後の調査及び関連業務を受託・実施しています。設立以来「科学的な調査」の企画・実施を社是とし、正しい情報としての調査データと最適な解析手法に基づく分析結果の提供を目指して業務を遂行しております。具体的には、企画時の対象者抽出方法へのこだわりや質問文・選択肢の熟考、実査での回収率アップ策実施、集計時の回答矛盾の扱い、分析での中立性維持と多変量解析駆使などの日々の努力により、調査の社会的価値向上に資することがリサーチャーとしての勤めと考えています。

業務内容

弊社が受託・実施している業務の大半は市場調査（マーケティングリサーチ）の範疇に入るもので、クライアント企業からの依頼を受け、商品やサービスに関連する消費者の態度を数表データやテキスト情報として表現し提供していますが、それ以外に大学の先生方や研究所から、価値観や生活意識・生活時間・情報行動などについての研究調査を受託しています。社会心理学会会員の先生方とも幅広くお付き合いをさせていただき、多くのご助言やご指導を受けると共に、調査や集計などで研究のお手伝いなどをしています。例えば、東海地震がマスコミを賑わした頃から、災害時の情報伝達について多くの調査を手がけ、大きな地震があるたびに「また調査だ」と準備を始めたりした時期もありました。阪神淡路大震災に関連する調査も多数実施しました。大震災直後の住民意識調査やその後の復旧過程の調査などを受託し、被災者や仮設住宅居住者に対する面接調査等を多数実施し、貴重な経験を蓄積しました。大地震から 10 年以上が経過した最近でも関連の調査が企画・実施され、被害の大きさ・復旧の難しさを再認識させられました。本年３月の東日本大震災については、初期の調査はまだ実施していませんが、復旧が進むにつれ阪神淡路大震災と同様の調査の引き合いが寄せられています。

弊社の実施業務の中で特筆すべきは、選挙の予測調査と出口調査です。1980 年代に入ってから、共同通信社の選挙予測調査（投票１週間前の動向調査）をお手伝いするようになり、95 年からは投票所での出口調査を担当しています。出口調査は、激戦区を抽出しての小規模な調査からスタートし、徐々に選挙区数を増やして 01 年の参院選以降は全選挙区で実施しています。衆院選の出口調査は 7,200 投票所で実施し、1 日に稼動する調査員・管理要員の総数が 7 千人にもなる大規模な調査となっています。

出口調査は後日に母集団データが得られる非常に稀な標本調査です。集計結果が提出された数時間後には、調査結果の妥当性が検証され、ズレが大きい場合は実査状況を詳細にチェックし、ズレの原因を検討して次回の調査に生かしています。こうした努力により、精度の向上と効率アップが図られています。また、出口調査は実査期間は 1 日のみで、やり直しがききません。大規模で短期間で精度がチェックされるというきびしい条件下で、どのように実査管理を行うべきかが、出口調査を行うたびにノーハウとして蓄積されていきます。選挙結果に対する有権者の関心が高いためか、出口調査への協力度は一般のフィールド調査より良好で、出口調査を通じて一般市民の調査への理解が向上し、調査環境劣化防止の一助となればと思っています。

賛助会員登録の経緯

前述のように、弊社は多くの社会心理学会会員の先生方にお世話になっていますが、その発端は、弊社の創業者である柳原良造が飽戸弘先生・鈴木裕久先生と知己であったことによります。私が入社して 2～3 年後の 1975 年ごろに、社長の柳原が当時 4

～5 名いた若手社員への社員教育の講師を先生方にお願いしました。飽戸・鈴木両先生や上笹恒先生・本間道子先生などが毎週来社され、調査法・解析法・統計学・心理学等を教えてくださいました。今思い返すだけでも身震いするほどの豪華な講師陣ですが、当時はそれが他人がうらやむほどの特別待遇であることも理解せず、不出来な生徒で先生方に大変なご迷惑をお掛けしたものでした。このような形のほかにも、実際の業務に関連して多くの先生方のご指導を受けることとなり、その輪がだんだん広がって行きました。その過程でお世話になった先生方が社会心理学会の運営に携られるようになり、受けたご恩に報いるという意味と学会の基盤強化に繋がればとの思いから、賛助会員になったのが 1990 年ごろと記憶しております。以降毎年大会に参加し、最先端の解析手法を始め興味深い研究成果を拝聴して、調査会社としての営業力増進と社員のスキルアップに活用させていただいています。

調査の代表性

調査は代表性が担保されて始めて「調査」と呼ぶことができ、代表性のない調査は「調査のようなもの」と考えてきました。今でもこの規定は通用するはずですが、現状では多くの調査が代表性が担保されていないネット調査で実施されています。

「調査」の代表性に関連して、住民台帳の閲覧規制が大きな影響を与えました。プライバシー保護のため住民台帳の閲覧規制が論議され、公益性の高い調査のみに閲覧が認められることになり、大半の調査では住民台帳からの抽出が不可能となりました。科学的な「調査」は、世論（民衆の意見）を把握する（客観的に測定する）有効かつ唯一の手段として活用されているものであり、住民台帳からの抽出という作業を経て行われる調査は、その結果が民衆の総意を表現するものとなりますから、テーマが何であれ公益性のあるものだと思います。世界に稀な抽出枠としての利用が出来なくなってしまったことは、リサーチャーとして残念至極です。

調査に携る者・調査データを利用する者は、「調査」と「調査のようなもの」をきちんと弁別し、有害なものを排除したり、無害化する努力が必要です。それができなければ良貨は駆逐され、結果として調査に対する世間の理解・協力が得られなくなる恐れがあります。これ以上調査環境が悪くなり、日本から「調査」が消えてしまうことは何としても防がねばなりません。

（よしむらはるひこ）

＊　＊　＊　＊　＊

『社会心理学研究』掲載予定論文

■27 巻 2 号（2011 年 12 月刊行予定）

《資料》

○常岡　充子・高野　陽太郎「他視点取得の活性化による言語的攻撃の抑制」

■お詫びと訂正

会報 191 号に掲載予定論文としてお伝えしました川嶋伸佳・大渕憲一・熊谷智博・浅井暢子「多元的公正感と抗議行動：社会不変信念、社会的効力感、変革コストの影響」（27 巻 2 号以後掲載）は、《資料》と記載されておりましたが《原著》の誤りです。記してお詫び申し上げます。

会員異動

（2011 年 8 月 6 日～2011 年 11 月 25 日）

■新入会員

《正会員》

・一般会員

伊藤朝陽（東京電力株式会社）、金井伸次（合同会社エイマークス代表社員）、川島達史（(株)ダイレクトコミュニケーション代表取締役）、佐藤正子（人間総合科学大学保健医療学部看護学科教授）、鈴木　真（南山大学社会倫理研究所研究員）、三木一太朗（(株)応用社会心理学研究所調査研究ディレクター）

・大学院生

大関智宏（東京大学大学院教育学研究科）、矢野裕理（京都大学大学院教育学研究科）

■退会者

泉　里子、清水　敦、高間　剛、平山　亮、三田村　仰

■所属変更

村本由紀子（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）、中畝菜穂子（国立教育政策研究所学力調査専門職）、三好美浩（岐阜大学医学部看護学科准教授）、木村登紀子（桜クリニック・いちかわ野の花心理臨床研究所臨床心理士）、林　幸範（こども教育宝仙大学）、泊　真児（沖縄国際大学総合文化学部人間福祉学科）、中村　真（江戸川大学社会学部人間心理学科准教授）、有泉優里（ユーストーリー（株）花香軽井沢ハーブ研究所美容心理研究員）、角山　剛（東京未来大学教授／モチベーション研究所所長）、森本裕子（総合研究大学院大学先導科学研究科特別研究員）、渡辺純子（国際医療福祉大学大学院生）、荒井崇史（筑波大学人間系特任助教）、山　祐嗣（大阪市立大学）、儀武由紀子（(株) マーケッティング・サービス）、出口剛司（東京大学大学院人文社会系研究科）、池田安世（名古屋大学教育学部研究生）

編集後記

みなさん、この時期あれこれ立て込むもので、今号の原稿も五月雨式とあいなり、予定の着地点よりは少しずれてしまいましたが、ご容赦。また期限の短い中で、強いメッセージをいただいた本年の社会心理学会賞受賞者の方々に、とくに感謝申し上げます。

師走といいながら、ランニングするのが宿命と考えている私があまり走れない師走。それって、ほんとに師走なのか。そういいながら、日々はたんたんと過ぎていきます。長く記憶されるであろう、今年。復活と飛躍の日々が来年につながっていきますように。よい年末、希望の新年を。

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail： jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1 件（1 回あたり）1,000 円（後日事務局より請求書をお送りします。）